

北海道医歌人会詠草



秋のコロナ

士別 竹内 幹夫

遺伝子の座に怯える人類よ 霊長の冠はあまりに重し
天地の別れし時ゆヴァイラスは 分け隔てなく神々を弑す
戦はず其処に在るだけのヴァイラスに 哮り挑めど勝ち筋も見えず
生贄を石もて打つ人そは誰ぞ 策潰えたる大臣どち
口を閉じ耐へて生くるは酒を酌む 寂しき心を慰むる人

閑院

滝川 村田 英俊

医院やめ長く通いし人々を永遠に忘るまじ医師なればこそ
別れの日がついに来たりぬいつかまたどこかで白衣着る君を見たい
留守電で何度も閑院告げたれば誰も来ない午後吹雪は止まず
閑院のために人々は素通りす外を行き交うマスクばかり見ゆ
所在なくも何か目的あるごとく居座り続ける重き医学書

白樺

江別 三宅 浩次

白樺の並木を抜ける秋風に涼しさを知るわが散歩道
白樺の白き木肌に魅せられてしばし歩みを止める秋の日
白樺の真っ直ぐに立つ素直さに正義感強き父思い出す
白樺が空の青さと対比するこの清々しさに心慰む
白樺は北国の木か美しくまた逞しき命教わる

アラギリ

札幌 浜島 泉

アラギリの花散りつくし雲薄く 道行く人のシャツ清すがし
雲の間を洩れ来る光 紅葉の山を明るく彩り極む
寒風に深紅大輪バラの花 淡き野菊を背に残り咲く
バスの中生徒ら試験勉強中 試問つくりし季節なつかし
バスを待つ児らが笑ひつ ブラインドサッカーボール転がる音の

未明の夢

釧路 兎玉 昌彦

大声をあげて破れし未明の夢、内なる鳴動なお鎮まらず
知らぬ間に内服多き齢となりフレイル進む蟄居生活
級友の計報あい次ぎ我が身にもカウントダウンの刻ぞ迫れる
「死んだ奴、皆、馬鹿だ」と言う人もやはり死ぬべき運命変らず
花のあるうちに終わるを願いつつ新しき眺めなおも夢みる

こき兄に

北広島 古屋雅三知

若き日は不倶戴天と思いしも時経るほどに絆深まる
為すことは総てが兄の真似なりて育ちし故に我現在あらむ
人情に厚き地域と氣に入りし半世紀住む陸奥に果つ
意に反し長患いの末なれば三年の日々を如何に思うや
兄一人 コロナの夏に身罷れば野辺の送りに行くも能わず

聴く秋

函館 水関 清

遮断機の前で足踏み 列車待つ 吾子の視線の先に特急
一村の家々の庭 柿熟るる ただ一軒の例外もなく
落ち葉踏む音は七色 聴く秋の 散歩は楽し秋晴れの山
一斉に羽化始めたる 蜻蛉の 乱舞のどこにも影なかりけり
不安とはひとつのあこがれ 未知の街 我を満たせよ学びの力